

としょかんNEWS 第90号



2014年9月9日
湘北短期大学図書館

学生選書ツアー第21弾 実施！！

夏季休暇中に図書館の“店頭選書ツアー”を実施しました。8月7日に紀伊國屋書店新宿南店にて行われ、15名（さぼ一ち倶楽部7名、一般8名）の学生が参加しました。“店頭選書ツアー”とは、図書館の利用者である学生自らが図書館にあったらいいと思う本、友達にオススメしたい本を、実際に書店の店頭で手にとって選書するという企画。今回の選書ツアーは21回目（さぼ部は6回目）となり、さまざまなジャンルの本が選ばれました。図書館ミカタのカウンター前とさぼ部コーナーに展示していますので、ぜひご覧ください。



さぼ一ち倶楽部、活動報告

● 桜美林大学図書館「読書運動プロジェクト」との交流会を行いました！

8月19日に桜美林大学図書館の見学と「読書運動プロジェクト（読プロ）」メンバーとの交流会を行い、さぼ一ち倶楽部の代表・副代表の2名が参加しました。

まずは館内をご案内いただき、読プロのメンバーによる展示コーナーなどを見学。次にお互いの活動内容について情報交換を行いました。イベント企画やミーティング、新入生勧誘など、具体的な運営方法についてお話を伺うことができ、さぼ部メンバーは刺激を受けた様子でした。情報交換の後は、全員で新潮文庫の中から紹介したい本を選んでポップを作成。完成したポップは桜美林大学図書館にて展示していただけたとのこと。最後に全員で集合写真を撮って交流会は終了。参加した学生は「この熱を1年生にも伝えていきたいと思います！」と意気込んでいました。さぼ部の今後の活動にご注目ください。

紹介する本を選んで・・・



それぞれポップを作成

完成したポップと本を持って
全員で記念撮影！



私が初めて聴講したビブリオバトルは、ある研究発表会の特別企画で実施されたものでした。その分野で大御所と呼ばれる大学教授や企業人が多く登壇したこともあり、同時並行で開催していたメインの研究発表会よりも活気があったことを記憶しています。基本的な流れとしては、発表者がお気に入りの本を5分間で紹介し、聴講者との質疑応答を経て、参加者全員の投票で読みたい本(チャンプ本)を決定します。当時の自分にとっては、知らない本に出会えることも面白かったのですが、あの有名人がこんな本を読んでいるのかと、発表者のセンスや興味に触れられることが印象的でした。

さぼーち倶楽部では定期的にビブリオバトルを開催していますが、本年度は情報メディア学科1年生のプレセミナーでも、ビブリオバトルを2度開催しました。正直なところ、うまく話せない学生もいるかなあと思っていた

のですが、予想以上に活発に、学生が自分の言葉で本を紹介しているのを見て一安心。実施の狙いはプレゼン能力やコミュニケーション能力の向上にあるわけですが、個人的にはやはり、面識ある人の興味に触れられることが面白かったです。普段本を読まない私が、さぼ部、情メのビブリオバトルに触発されて、私が参加したグループのチャンプ本(文末)を一気読みしてしまいました。学生の肌感覚理解の一助として、教職員こそ読むべきかと思います。いずれも本学図書館にありますので、ご興味があれば是非。

チャンプ本(一部):『秘密』(文藝春秋、2001年)、『向日葵の咲かない夏』(新潮社、2008年)、『六百六十円の事情』(アスキーメディアワークス、2005年)、『ディズニールンドであった心温まる物語』(あさ出版、2013年)、『その英語、ネイティブにはこう聞こえます3』(主婦の友社、2014年)。

【連載】館長閑話(11) 名もなき庶民を描いた「清明上河図」 館長 野口周一

前回は故宮の財宝文物が日本軍の中国侵攻により、中国の奥地に疎開されたことを紹介した。この経緯については、古屋奎二著『故宮博物院物語』(碩文社、1983年)に興味深く語られている。その第7章は「台湾に甦る中華民族の伝統」という章立てである。何故、台湾なのか。例によって中学生用歴史教科書を紐解くと、「アジアの独立と中国・朝鮮」の項に、「中国では、国民政府と共産党との内戦がつづきましたが、共産党は土地改革などによって民衆の支持を集め、1949年、毛沢東を主席とする中華人民共和国を成立させました。いっぽう国民政府は台湾に追われました」とあり、欄外に「台湾にのがれた国民政府は、大陸の中華人民共和国と対立しました。日本は、1972年に中華人民共和国と国交を正常化し、台湾との国交を絶ちました。しかし、人や物の交流はさかんにつづけられています」と注記されている(『中学社会 歴史 未来をみつめて』教育出版、2010年)。つまり、蒋介石が率いる国民政府は共産党との内戦に敗れ、台湾に逃れたのであったが、その際に故宮の財宝文物を持ち去ったのである。前掲『故宮博物院物語』は「逸品のほとんどは台湾へ」と記す。

さて、故宮の財宝文物であるが、今回の目玉は翡翠の色合いを白菜に見立てて精巧な細工を施した「翠玉白菜」、豚の角煮そっくりの「肉形

石」であり、その展示は日本側からの要請であった。とにかく、その収蔵数は69万6千点という膨大な数にのぼる。私は前任校時代、学生を引率して一か月を単位として何度も台北を訪れていたが、自分が見たいと思う文物に出会うことは、一般人としては至難の業であった。しかし、表題の『清明上河図』に遭遇したことがある。中国の都はと問われると、普通は長安という回答がなされる。長安は唐(618-907)の都として知られ、その主たる住民は皇帝とこれを取り巻く貴族であったと言われる。しかし、宋の時代になると(北宋、960-1127)、都は開封におかれた。開封は黄河の流れに近く、長江にまで通じる大運河をはじめ、4つの運河が町中まで達していた。従って、南方をはじめとして全国各地から物資が滞留し、これらの大量の物資を元手にして、この町の繁栄が築かれ、住民たちの豊かな生活が営まれるようになったのである。『清明上河図』の主人公は、町中に住む商人や職人に加え、近から作物を売りに来た農民たちであった。ここでは、庶民がどこにでも店を出すことができ、通りに露店の市も開かれ、彼らが生き生きと毎日を送る経済都市であった。そこがさらに政治の中心ともなったわけである。つまり『清明上河図』の意義は、宋代の名もなき庶民たちの生活が描かれている史料として貴重なのである。